大ヨーロッパ

中大生のレポート

2

ひとつの国のように

経済学部
黒沼　勇史

為替レートの心配なし

昨年、東欧を行った。ロンドンを夜9時に発ち、フランス、ベルギー、オランダを通って、翌日夕6時ごろベルリンに着く夜行バス。英仏間では国境警備隊員が寝ている乗客も起こしてパスポートチェック。「国境を越えるたびにこれじゃあ、眠れないじゃないか」と、ぶつくさ。そしてウトウト。目覚めるとオランダだった。「あれ、ベルギーのパスポートチェックは？」と隣の女性に尋ねたら、「大陸に入ってしまえば、そんな面倒なことないのよ」

遠からず国境線は消える？

復路、オーストリア、ドイツ、オランダ、ベルギー、フランスと4つの国境を越えたが、それは「ここから埼玉県」という道路標識と何ら変わらない看板が、たった1枚あるだけだった。陸続きEU（欧州連合）加盟国間の国境は、すべてが日本の県境程度というわけではなく、イタリアなどでは英仏間のような越境手続きがあるらしいが、治安の均一化などとともに、ヨーロッパの国境線は遠からず消えていきそうだ。

ここ、イギリスのカーディフ大学には、たくさんのヨーロッパ人留学生がいる。交換留学生に限定すれば、98％以上がヨーロッパ人だ。これもEUの政策の一つで各国の大学に一定数の枠を決めている。

やがて、欧州を背負う若い世代が留学を通して隣国に愛着を持つようになれば、「大ヨーロッパ」の強い絆となるだろう。

昨年、ここの留学生だったイタリア人のレオ君（23歳）は、ロンドンで就職活動をしている。「国際的な銀行や会計コンサルタントを狙っているけど、英語力がね……」という程度で、就労ビザや滞在期限はレオ君には無関係であり、失業手当などの社会保障もイギリス人同様に受

けられる。これもすべてEUの政策のお陰であり、本誌1月号で少し触れたEEC（欧州経済共同体・1957年）以来、「ヒト・カネ・モノ・サービスの移動自由化」を中心的な政策として進めてきた経緯がある。

隣国に優秀な人材とられる

なぜ、EUは国境での手続きをなくし、労働者を自由に移動させるのか。そのいい例が400年前の日本にある。戦国大名・織田信長の関所の撤廃と、楽市楽座という政策を覚えているだろう。商人の移動が自由になり、それまで閉鎖的だった中部・近畿地方の市場に商人があふれ、経済が急に活性化した。

小国が分立していた、かつての日本で信長がやったことを、いまEUがヨーロッパ各国でやっている。例えば、サッチャー以来の規制緩和で、優れたビジネス環境の整ったイギリス、ミッテラン以来進んだ社会保障制度を持つフランスなど、それぞれ施策に特徴を持ち、人も企業も国籍にとらわれず、個々の目的に合わせて国選びが自由にできる。すると、ヨーロッパ中で就職競争が激しくなり、学生にとっては迷惑な話となる。企業にとっては盛んに進出してくる隣国の同業者に、優秀な人材を取られてしまうから、おちおちしていられない。

さて、カネは自由に動くようになったのか。残念ながら為替レート（「1ドル＝○円」で知られている交換比率）が毎日変わるなか、大規模なカネはなかなか動かない。例えば昨年8月に1英ポンドは250円ぐらいだったが、年末には180円になっていた。へたにカネを動かすと、5万円が3万6千円になってしまう。仏フランと独マルクの間などでも同じリスクがあり、企業や投資家はなかなか進出や投資ができない。

ユーロのニュースは新聞に出ない日はない

国境越えるカネの動きが容易に

そこで登場したのが、欧州統一通貨「ユーロ」。今年1月1日から、EU加盟国のうち、11ヵ国の為替レートを固定し、新しいお金の単位・ユーロを銀行や投資家の間で使い始めた。レートが動かなければ、1万4千円を損してしまうような為替変動リスクもなくなる。ユーロを使う国々では、国境を越えるカネの動きが、以前よりも容易になってくる。例えば、企業が隣の国の銀行に資金を借りるにしても、為替レートの心配はないからだ。

これでヨーロッパ版の楽市楽座、つまりヒト・カネ・モノ・サービスの移動自由化が完成したことになる。まるでひとつの国のように……。

（裏面に続く）

ユーロへの参加

2～3年内に英国も

英国の情報コンサルタント
イアン・トムソン氏にインタビュー

カーディフ大学には「欧州公文書センター」という、EUに委託された資料館がある。そこで情報コンサルタントとして働く、イアン・トムソン氏（45）に「ユーロ」について、いろいろなお話を伺った。

――統一通貨「ユーロ」の発想は、いつごろから。

「1960年代から研究が始まり、70年に為替レートの固定を決めたのですが、段階的に失敗を繰り返してきました。今回の具体的な計画は80年代後半から始まり、92年の欧州連合条約でユーロ導入の予定を決定しました」

――ユーロの利点は。

「一つには政治的な意味があります。EUがユーロというお金を使うことによって、内外に対するユーロ統一性のシンボルとなります。経済的な意味としては、為替レートの固定が大きな意味を持っています」

――一般市民にはどんな利点が。

「国によって違いのあった価格が均一化されてくるでしょう。例えば、車の値段がドイツと比べ、イギリスでは最大45％も高いことがあります。しかし、通貨が違うと買い手にはそれがわかりません。ユーロを使う国では、こうした問題は解消され、物価は安いレベルで均一化されるでしょう。そうなると売り手の競争はより激しくなり、作り手はもっと効率を良くしなければなりません。

トムソン氏（右）にインタビューする筆者

もう一つの利点は、通貨を交換するときに銀行に払う手数料が、ユーロを使う国々の間では必要なくなるということです。しかし、これはユーロのコイン・紙幣が出回りはじめる2002年1月1日を待たなければなりません」

――日本企業にはどんな影響が。

「日本の自動車メーカーなどは、輸出量を制限されるなどマイナス面もありますが、EU内に自社の工場を持つ企業にとっては、通貨の統一だけではなく、安全規格や経営法・労働法の統一化で、とてもやりやすくなります。

規格でいえば、販売先の国が違えば、それぞれの規格に合う部品を作らなければならなかったのですが、EUの統一規格のため一種類の部品ですむようになりました。一方で、イギリスの日系企業の工場で作られた製品は、日本製か、イギリス製かという論議がありました。イギリスは英国産としてフランスへ輸出したいのですが、フランスは日本製とみなし、EU外からの輸入品にかける関税を課すと主張しました。日系といっても社員・工員の多くがイギリス人ですから、難しい問題です」

――ユーロは失敗する可能性があるといわれていますが。

「第一に、経済状態が国によって違うのに、欧州中央銀行がユーロ加盟11ヵ国（ユーロランド）すべての金融政策を一手に握っているところに無理がある、といわれています。例えば、好況のアイルランドは金利を上げたいのに、多くの加盟国が下げたがっているため、不況用の政策を受け入れなければなりません。

第二に、近年の不況がユーロランドに襲いかかるかもしれません。各国に独自の金融政策の決定権がありませんから、ヘタをすると、全ユーロランドが投機家に狙われるかもしれません」